方

方は、耕作に使う“すき”の象形字ですが、今は、“方法”（読み方、書き方の方）という使い方と、“四方”（四つの方角）という使い方と“四角”という使い方が多く、本義には全く使われません。方形（四角形）、正方形、長方形。

防は、阝と方との会意形声字です。阝は崖のしるしの部首ですから、“四方を崖で囲む”という意味になります。つまり、外敵から守るための土手を周囲に築いて“ふせぐ”という意味の字です。防壁、防禦、防衛。

坊は、本来防と同じ意味の字で、外敵をふせぐための土の防壁や、水をふせぐために土を積み上げて作った堤防が本義の字です。転じて“防壁で囲まれた建物”を坊と言うようになりました。僧の居室を「僧坊」というのはこの意味とも取れますが、また「僧房」の意味とも取れます。僧坊の主（あるじ）を「坊主（ボウズ）」と言うのですが、今は単に僧の意味に使います。「坊ちゃん」というのは、子供は髪の毛を僧のように短く刈っているために起こった呼び名です。

妨は、“四方に女がいる”ということで、女に囲まれては、仕事が“さまたげられる”という意味の字です。気が散って、確かに仕事にならないでしょう。妨害、妨止（防止と意味が違うことに御注意ください。人の仕事の邪魔をして、させないことです）。

紡は、まゆの糸を何本も合わせて一本の糸により上げること、“つむぐ”ことを表わした字です。細糸の糸まきを四すみに置き、四方から一緒に引いてより合わせますので、方と糸とで表わしました。“つむぐ”ということばは、つむ（錘）という重りを使ってより合わせるところから生まれました。「混紡」は、つむぐ時、同じ種類の糸でなくて、異った種類の糸をまぜて使ったものという意味です。

肪の方は、“四方”つまり“まわり”の意味。“体のまわりの肉”ということで、“あぶら肉”を意味しています。ついでに言いますと、「脂肪」の脂は“旨（うま）い肉”という意味の字で、あぶら分の多い肥えた肉のことを言います。旨の旨は口の中に食べ物のはいっている形です。

彷は、あっち（彼方）へ行ったり、こっち（此方）へ行ったりして、行く方角がはっきりしていないという意味の字で“さまよう”ことです。彷徨。また“はっきりしていない”ことから“ぼんやり”の意味にも使われます。

芳は、“あたり（四方）一面が草花におおわれている”という意味の字で、“美しい”という意味に使われます。芳香、芳草。また「芳志」「芳名」というようにも使われます。

訪は、“あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしてたずねる（言）”という意味の字です。歴訪、訪問。

放は、古い字形は で人と攵（ボク）との合字になっています。攵は、手に棒とか鞭とかを持った形で、従って、放は“棒をふるって人を追いはらう”という意味の字です。音は攵（ボク）が変化してホウになり、その音から“攵”が“放”と書かれるようになったものでしょう。追放、放伐。

「放浪」は、追い放たれて、あちこちさまよい歩くのが本義ですが、今は“気ままに歩きまわる”意味に使われます。そのため“勝手”“気まま”の意味に使われることが多くなりました。放歌、放言、放縦、放蕩。